

□ 白石壽文・権藤順子編著『小学校作文の鑑賞―文集が誘う個性と文種―』二〇二二年六月、銀の鈴社

※「実践の意図、文集づくり・鑑賞会の特色」に該当する本書中の項目は、「わたしの願い」「児童の実態」「実践」事例、「鑑賞会」等である。「指導の成果と課題」に該当する項目は、「児童の変容」「保護者の声」「これからに向けて」等である。

学年・テーマ	実践の意図、文集づくり・鑑賞会の特色	指導の成果と課題
実践Ⅰ Q&A 「文集で学力をつけることができるでしょうか」 ・「一『文集学習』が目指す効果」の中で、「文集学習」は国語科の中でなく、余剰時数や総合的な学習、朝の時間を利用するとされる。「二 具体的な『文集学習』の流れ」、「三 主体性を育てる教師の言葉かけ」について述べられている。	・自分の思いを様々な表現で書き表す力をつけたい。 ・「 <u>きらり言葉</u> 」や「 <u>会話文</u> 」を見付けける鑑賞会を行う。 ・「 <u>しゃぼんだまあそびをしたよ</u> 」の「 <u>絵日記形式</u> 」で作文を書かせる。 ・鑑賞会では「 <u>会話文</u> 」や「 <u>様子言葉</u> 」に目を向けさせた。 ・「 <u>本庄公園に行ったよ</u> 」の「 <u>絵日記形式</u> 」作文を書かせる。 ・鑑賞会では「 <u>様子言葉</u> 」や「 <u>比喩的表現</u> 」に気付かせた。	・「 <u>あのね日記</u> 」で「 <u>様子言葉</u> 」の語彙に広がりが見られる。 ・「 <u>会話文</u> 」「 <u>順序言葉</u> 」「 <u>様子言葉</u> 」の表現に気付くことが出来た。 ・友達の表現の「 <u>良さ</u> 」を活かし書く楽しさを感じていけるように導きたい。
第一学年 友達によさを 見付け、よさを 感じることで表 現技能が広がる 文集づくり	・友達や自分の表現の良さに気付かせたい。 ・書く意欲、鑑賞会の意欲、多様な表現につながる内容の広がり第一に考えた。 ・毎日の連絡帳にその日の出来事を書かせ始めた。 ・内容面、表現面の双方からその子らしさに目を向けさせた。 ・鑑賞会では、子どもの名前を伏せて、表現の良さを見付け出し合わせて、名前を当てさせた。	・鑑賞会で取り上げた着眼点を使って書く児童が増えてきた。 ・鑑賞会を通して、自分の得意技を見付け楽しんで書くようになった。
第二学年 豊かな表現が 広がる、書くこ とが好きになる 文集づくり	・児童が書きたいことを豊かに表現できるようにさせたい。 ・鑑賞会では、「いいな」と思った表現を取り出させる。 ・鑑賞会を重ねた後の作文の中には、喩えの表現などが用いられるようになった。 ・鑑賞会を通して、大半の児童が題名や書き出しに自分なりの表現の工夫をするようになった。	・鑑賞会を重ねるうちに、以前学んだことを取り入れて書くようになってきた。 ・今後は文集学習を学級経営の基盤とし、鑑賞会が児童相互、児童と保護者、教師とをつなぐ場としていきたい。
第三学年 いろいろな文 種を楽しむ児童 が育つ文集づく り	・児童の文種を広げるための一枚文集の在り方について探る。 ・鑑賞会では、「一枚文集で複数の文種を示し、生活文以外の文種への広がり期待している。」 ・自分の思いがより伝わる文種を選んで書くことを勧めた。	・日記に詩や今までに書かなかった複数の文種で書く子がでてきた。 ・一枚文集でいろいろな文種で書けることの楽しさを価値づけたことが児童の文種を広げることにつながった。
第六学年 内容に応じた 文章の形式を選 んで楽しんで書	・多様な形式と文種に気付くことができるような文集づくりと鑑賞会を行う。 ・教師が意図的に四つの作品を選んで「一枚文集にした。」 ・内容や目的から文章の形式を選んで書くと、読み手	・複数の形式や文種を提示し、用紙の工夫をすることで書く事への抵抗がなくなり楽しんで書く子が増えてきた。

<p>く文集づくり</p> <p>第六学年 資料を基に自分の思いや考えを表現した文集づくり</p>	<p>をひきつける効果があることに気付いた。 同じ形式で書いている友達の言葉の使い方を参考にしたり、違う形式で書いている友達の作品に関心を抱いて読み比べたりする姿が見られた。</p> <p>・社会科の学習の中に資料から情報を取り出し意味を解釈し、熟考・評価した行為を観点として設け、資料を基に自分の思いや考えをもつ児童を育てようとした。 ・児童の作品から自分なりの解釈と感想などの記述があるものを抽出し文集を作った。</p>	<p>・鑑賞会を通して内容に共感したり表現や言葉のリズムの良さを見付けることが出来た。</p> <p>・文集の作品に触発されて「熟考・評価」し、自分の思いや考えを「表現」していくまでの力がついた。 ・今後も、意見文の鑑賞の場を設け、異なる見方や考え方に数多く触れさせたい。</p>
<p>実践Ⅱ Q&A 「文集にはどのような種類がありますか」</p> <p>・「読み手や編集者による分類」 ・「発表媒体による分類」 ・「冊子文集、パンフレット・リーフレット状の文集、一枚文集、教室環境としての「文集」、デジタル文集Ⅰ（CD等の記録媒体）、デジタル文集Ⅱ（Webを発表の場として）」</p>	<p>実践Ⅱ Q&A 「文集にはどのような種類がありますか」</p> <p>・「読み手や編集者による分類」 ・「発表媒体による分類」 ・「冊子文集、パンフレット・リーフレット状の文集、一枚文集、教室環境としての「文集」、デジタル文集Ⅰ（CD等の記録媒体）、デジタル文集Ⅱ（Webを発表の場として）」</p>	<p>・表現技法に疎い子でも意欲的に参加するようになった。 ・日記や絵日記以外に俳句・川柳、新聞、詩等の文種が取られた。 ・新たに、ポスターと想像文の文種が加わり文種の広がりが見られた。しかし、中には文種の偏りが見られる児童も数名いた。 ・題名の工夫が見られた。 ・保護者からの感想も児童の喜びになっていく。</p>
<p>第四学年 気軽に参加して表現技能や文種が広がる文集づくり</p>	<p>・冊子文集づくりを通して友達の思いや良さに気付かせたい。 ・児童の共通体験を題材にし、様々な文種で書かせる。 ・十一人の児童作品を綴った文集で、鑑賞会を開く。 ・表現についての良さを指摘する意見がいくつも出た。 ・鑑賞会の度に指摘された良さや好きな表現を教室に掲示した。（書き出しの工夫、比喩・倒置法・繰り返し等の表現技法の工夫。様々な文種の作品。） ・自分が書きたいことにびつたり文種を考えさせた。 ・鑑賞会では、十二人の作品の文集を取り上げた。書き出しの工夫等についての意見が多く出された。 ・様々な文種への広がりが見られた。 ・様々な文種を選んで書かせ、五回文集を編んだ。</p>	<p>・読み手の感想を鑑賞会や感想カードで伝えあうことにより相手意識をもつて書くことができるようになった。 ・見出しの付け方に工夫が見られた。 ・発刊の度に割り付けに慣れ、楽しく読みやすい紙面作りができるようになった。 ・保護者からもたくさん感想カードが寄せられた。 ・読み手意識が高まった。</p>
<p>第四学年 読み手を意識して書く文集づくり</p>	<p>・多彩な内容・文種が盛り込める新聞づくりに取り組んでいる。学級新聞づくりを一年間継続した。 ・鑑賞会での友達への反応からもっと読みやすい新聞にする工夫を考える児童も出てきた。 ・見出しの付け方と割り付けの仕方を学ばせる。 ・四〜五人の班で編集会議をさせている。 ・鑑賞会では、八班分の新聞を一度に配って感想を伝えあっている。 ・教室に投稿ポストを設置し記事や作品（漫画・俳句・物語等）の投稿を呼びかけた。 ・鑑賞会では、具体的な表現の良さを見付けてほめる意見が出されていた。</p>	<p>・「川柳」を作る際の技法を他の作品を読み込むことで学び取っていた。 ・川柳の作品を提出する前に、友達と鑑賞ごっこをして言葉の広がりや工夫を確かめ合う事が多くなった。 ・入選作品を教室に拡大掲示すること、朝の会の前に自ずと鑑賞会が行われるようになった。</p>
<p>第四学年 児童の文種や表現が広がる教室環境としての文集づくり</p>	<p>・文集発行の工夫と作品の綴じ方、鑑賞の仕方の指導に意を用いた。 ・文集の形態を「作品を綴じたもの」と教室背面使って「作品を掲示したもの」の二種としている。 ・鑑賞会では、一枚文集から気持ちを表す言葉の工夫を見付けさせ、背面黒板に書き出している。 ・教室の背面掲示の半分を作文紹介コーナーとして活用している。 ・『西日本新聞』の「ヤング川柳」への投稿を勧めた。 ・新聞に採用された川柳の鑑賞をペアやグループで出し合わせた。</p>	<p>・入選作品を教室に拡大掲示すること、朝の会の前に自ずと鑑賞会が行われるようになった。</p>

<p>第五学年 友達の作品のよさを味わわせながら、文種を広げる文集づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> 一枚文集を学級便りにして配布している。 「秋」らしさを感じさせる言葉の学習の後に、秋らしさを感じたことを日記に書いたり、俳句づくりをさせている。 鑑賞会では、俳句作品について言葉の使い方や選び方の良さに目を向けた意見が出ている。 「菓子づくり」についての日記から物語を作らせている。 	<ul style="list-style-type: none"> 一枚文集から他者の表現の工夫や言葉選びの良さに学ぶ姿勢が出てきた。 鑑賞会を通して創作への意欲や互いの作品の良さを見つけ認め合うような姿勢が生まれってきた。
<p>第六学年 書き手と読み手を行き来しながら表現が広がる文集づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> 記者を一人または二人として全員が輪番で一枚新聞「きのうの新聞」づくりをさせている。 新聞づくりで取材の目を育てるために「見出し特集号」を編んでいる。 鑑賞会では、「特集号」に掲載された見出しと本文とを照らし合わせ良さと工夫について話し合った。 「私のベスト特集号」を作らせて自分が推薦する新聞や記事を取り上げ、良さと意見・感想を伝えさせた。 	<ul style="list-style-type: none"> 五七調や韻を踏んだり音や絵を入れた表現方法の効果に気がついた。 読み手を意識した記事や表現が見られるようになった。 目的や読み手に応じて適切な資料を作ること、箇条書きや短いコメントを文種に応じてつけることに気がついた。
<p>第六学年 友達の表現技法を獲得し、文種の違いに気付く文集づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> 表現を広げる過程で、児童が自然に他の作品に学べるような環境を整えてやることを考えている。 新聞型文集を教室に掲示しておき、いつでも参考に出来るようにした。 鑑賞会では、投票用紙に最も良いと思う作品を選択させている。 文種の広がりを目指して、同じ題材で生活文・創作文・意見文・報告文・感想文の五種類で書かせた。 	<ul style="list-style-type: none"> 「文種によって、書く内容が少し変わってくる」ということにも気付くようになった。 書きたい内容によって文種を選んで書くようになることに期待が出来る。
<p>実践Ⅲ Q&A 「文集を作るとき鑑賞会は必要ですか」</p> <ul style="list-style-type: none"> 鑑賞会では、三つの原則を踏まえる。 <ul style="list-style-type: none"> ①時間（いつ、継続的） 場（椅子、床） 人数（一人、ペア、グループ、全員） 空間（壁面、紙媒体、音声等） ②相手 目的 ③教師の位置（指導的、クラスの一員、自作例、他作品紹介等） こんな鑑賞会をしてほしい。 <ul style="list-style-type: none"> ○筆談鑑賞会（筆談自体も文集に活用できる） ○きらきらNO1鑑賞会（文章表現の良さや友達自身の良さ、文集としての綴り方の良さなどを発見する） ○いただき鑑賞会（次の文集を書くきっかけとなる） ○付箋紙鑑賞会（たくさんの意見を収集できる） 	<ul style="list-style-type: none"> 俳句作品群の学級文集をもとに筆談を行い、俳句づくりの成就感や文集への愛着が生まれ、表現技法も内容も充実させることを図る。 鑑賞会を通して出された気付きやアドバイス等を教室に掲示する。 学級文集には、作品の後に筆談した児童のコメントを載せる事になっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 文集にすることで、俳句表現の特性や叙情と叙景の違いに目を向ける子も出てきた。 鑑賞会や文集を心待ちにする子も出てきた。話すことの苦手な子は鉛筆対談を好む傾向が強い。
<p>第五学年 説明の愉しさを味わう鑑賞会</p>	<ul style="list-style-type: none"> 説明的な文章の鑑賞会を行う。 算数や社会科、総合的な学習の教科で説明文を綴らせることで、目的に応じた書き方を学び合わせた。 鑑賞会では、模倣したいことを付箋紙に書いて、説明するためのアイテム（事項）ノートに貼らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 付箋紙を貼ったアイテムノートで説明文を書く技を高めて行けた。 一口感想の鑑賞会から意見を交換するやりとりに導こうとしている。
<p>第六学年 友達・自分発見！あなたにお薦め鑑賞会</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「推薦文鑑賞会」を通して様々な見方・考え方、表現の仕方を共有し、お互いの認識や自分の再発見につなげようとしている。 「効果的な○○お薦め鑑賞会」を通して「○○グループお薦め文集」を作成した。 	<ul style="list-style-type: none"> 「推薦文鑑賞会」の後に書いた推薦文により効果的な描き方が意識されていた。 「お話し感想カード」によって、鑑賞会や文集の価値を見

<p>第六学年 「リレー掲示板」での鑑賞会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「お薦め文集」を図書室や公民館にも置かせて貰った。推薦文に対して「お試し感想カード」も書かせた。 ・グループ別から全員の作品を載せた『拡大文集』鑑賞会」を開いている。 ・年度末に「個人文集」を作り「個人文集」鑑賞会を開いた。 	<p>いだけた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「拡大文集」によって一度にたくさんさんの情報が得られた。 ・「個人文集」鑑賞会によって各自が表現技術の向上を実感できた。
<p>第六学年 学級通信の投書に重ねさせる「紙上鑑賞会」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・意見文の鑑賞会のための時間を確保するために「リレー掲示板」での鑑賞会を設けている。 ・日本語の特性や良さについての意見文を書かせた。 ・「リレー掲示板」には、教室背面を使い、掲示した意見文の下に「B4用紙」貼り付け、これを掲示板とさせている。休み時間や放課後に感想や気付きを書いた付箋紙を貼らせている。 ・「リレー掲示板」では、意見文を書いた本人や教師も参加してコメントの交流が行われている。 ・「掲示板」鑑賞会の後で、出された鑑賞の視点と掲載された意見文も併せて「オリジナル文集」として綴らせた。 	<p>「リレー掲示板」での鑑賞から「オリジナル文集」を綴る活動までに児童は鑑賞の視点に気をつけてコメントを書くことが出来るようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いにそれぞれの作品の良さを見つけ合い、学級に支持的風土が生まれてきた。 ・「リレー掲示板」により特別な時間を設けなくても鑑賞会が行えるようになった。
<p>第六学年 第一・四・六年 みんなでつくる愉しさに誘う『家族鑑賞会』</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学級通信の紙上に「投書」を発信し合わせる。 ・学級通信に掲載されている作品群を自分だけの文集に取り入れて編集作業を行わせて、何度も読み返したくなる文集を完成させる。 ・「投書」は学級通信にリレー式に掲載され、それらの投書を「紙上鑑賞会」につなげている。 ・「投書」が学級通信に溜まってきたところで、保護者にそれらの投書を読んで貰い、保護者からの投書も求めている。 ・「校内主張大会」を愉しむイベントを開催している。 ・子ども達の日記や作文を文集にして読み合う『家族鑑賞会』を通して、ものの見方や考え方を広げ家族の絆を深めようとしている。 ・この実践を執筆している教師の家族で行った「家族鑑賞会」が報告されている。その内容を基に小六の長男の子が割り付けを行って「家族新聞」を作った。それぞれの記事には、見出しを付け、出来上がった新聞は家族全員で鑑賞し合った。 ・大阪や東京に住んでいる親戚にも、出来上がった新聞を電子メールで届けさせている。これに対して、親戚からは感想が寄せられている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学級通信という表現の場を児童にひろくことで、意見文の大切さに気付く投書を愉しむ児童が育った。 ・リレー式投書を行うことで、ものの見方や考え方、論の組み立て方が広がった。 ・投書の構成要素として、<u>図表</u>などの非連続型テキストを取り入れる際の扱い方を考慮していく必要がある。 ・「家族鑑賞会」では、表現技法やそれぞれの思いに沿って交流が行われ、家族団欒のひとつが過ごせたという。 ・「家族新聞」作りをきっかけに生活の中で気になったことをメモに残したり、日記に書いたりする様になった。 ・新聞の切り抜きに意見文を添えて「家族新聞」まとめて鑑賞し合う活動も行いたい。
<p>実践Ⅳ 文集活動の継続と発展</p> <p>【Q1】「文集を発行した後の指導としての評価・交流活動について、具体的な指導のあり方を教えてください。」</p> <p>【Q2】「文集を作成し手も、これまでは帰りの会で配布し、家に持ち帰らせて終わりにしていました。文集を活用しての『書く力』『話す力・聞く力』を伸ばすための事後の指導法を教えてください。」</p> <p>【Q3】「このような先進的な文集に取り組んで進学してきた学習者に対して、中学校では、どのように発展させた文集指導をしていけばよいでしょうか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・交流のねらいをはっきりさせて、児童の素直な感想や意見が相互評価として結びつくようにし、作品を鑑賞し合う学習とする。 ・本実践では、様々な文集の在り方を提案している。とりわけ「一枚文集・数枚文集」づくりを中心として、児童相互に読み合う時間を設け、教師も交えての鑑賞会を行っている。鑑賞会は、朝の会や帰りの会等の短時間でも行えるような工夫が成されている。 ・中学校でも、まず、書くことを厭わない生徒を育てることを目指し、学校生活の様々な場面で書く 	

<p>活動を仕組んでいきたい。また、文集を鑑賞する力を育てるために、「対話」「語り合い」を厭わぬ生徒を育てていきたい。</p>	<p>第一学年 よさを伝え合 い書くことが好 きになる文集づ くり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国語科の学習内容も含め、言葉遊び集、書き慣れ作文集の鑑賞を通して、友達や自分の作品の良さを見つめる楽しさを大いに感じていた。 ・文集鑑賞では、良さを認め合うことで書くことに自信がつき、書く意欲が高まった。
<p>第二学年 鑑賞会で広がる文集づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・入門期にある一年生が書いた文章を身近な人に読んでもらい、その喜びがさらに書くことへの意欲につながるような手立てを講じたい。 ・「ぼく・わたしの思い出」のお気に入りの場所（学校編）文集」で伝え合う楽しさを共有させている。 ・児童全員（六名）の作品を文集にし、鑑賞会では、「〇〇さんへ」という一言感想をカードで書かせている。 ・「ぼく・わたしの冬休み」心に残ったことをみんなに伝えよう」という題材で書かせる。前回の「文集」を使って「書くことのコツ」を活用させている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞会で何度も句品が取り上げられた子どもは、書くことに対する自信をつけた。 ・これからは、児童自身が編集し作成して愉しむ文集づくりも目指したい。 ・鑑賞会でも、お互いの意見を出し合い、書くこと自体を高めていくものにしていきたい。
<p>第四学年 文章世界が広がる文集づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童自身が生み出した文章を教材として使用して指導が出来るようにしたい。 ・季節毎の作文を集めた「四の一歳時記」文集を作成し、自他の作品を読み比べる鑑賞会を行っている。 ・「文章集から詩集」への展開を図り、付箋を使って感想交流やクイズ形式の交流を行わせている。 ・総合的な学習と関連させた文集づくりで、東日本大震災の調べ学習から作文や詩を書かせている。 ・冬休みの文集づくりでは、五七五の俳句や短歌づくりをさせている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文種を広げていく楽しさを感じさせられた。 ・児童も教師も気軽に綴る活動を愉しみ、書く力を身につけていくことが出来た。 ・様々な文種に関心を抱いて日常生活の中から個人文集が生まれてくるように誘いたい。
<p>第六学年 読みたい、書きたい、作りた い！ オリジナ ル文集づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『ゴールデンウィーク文集』づくりでは、文集を自由に、詩や俳句、川柳、短歌などの制作をさせて冊子にまとめている。 ・佐賀県児童文集『キラリ』へ向けた作文では、児童と教師の二段構えの推敲を取り入れている。 ・鑑賞会では、「①一人読み」②グループ読み③家庭読み④一人読み⑤比べ読み」と計画的に行わせている。友達や保護者からの励まし、感動、喜びなどのコメントも貰っている。 ・書くことが好きになるための教師の工夫として、文集のオリジナル性を高め、様々な文種に親しませる工夫が挙げられている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作品が手元に残ることに楽しみや喜びを感じるようになった。 ・これからも、様々な文章に触れる場、互いに楽しく読みあえる場、交流する場を多く設けていくようにしたい。

【資料編】 文種Q&A（文種の定義）

- 「文集相関図」（別紙・六頁に添付した資料を参照。）
- 定義が行われている文種（手紙文、推薦文、説明文、図表を使った文章、報告文、学級新聞、想像文・物語、詩、短歌・俳句、随筆）